

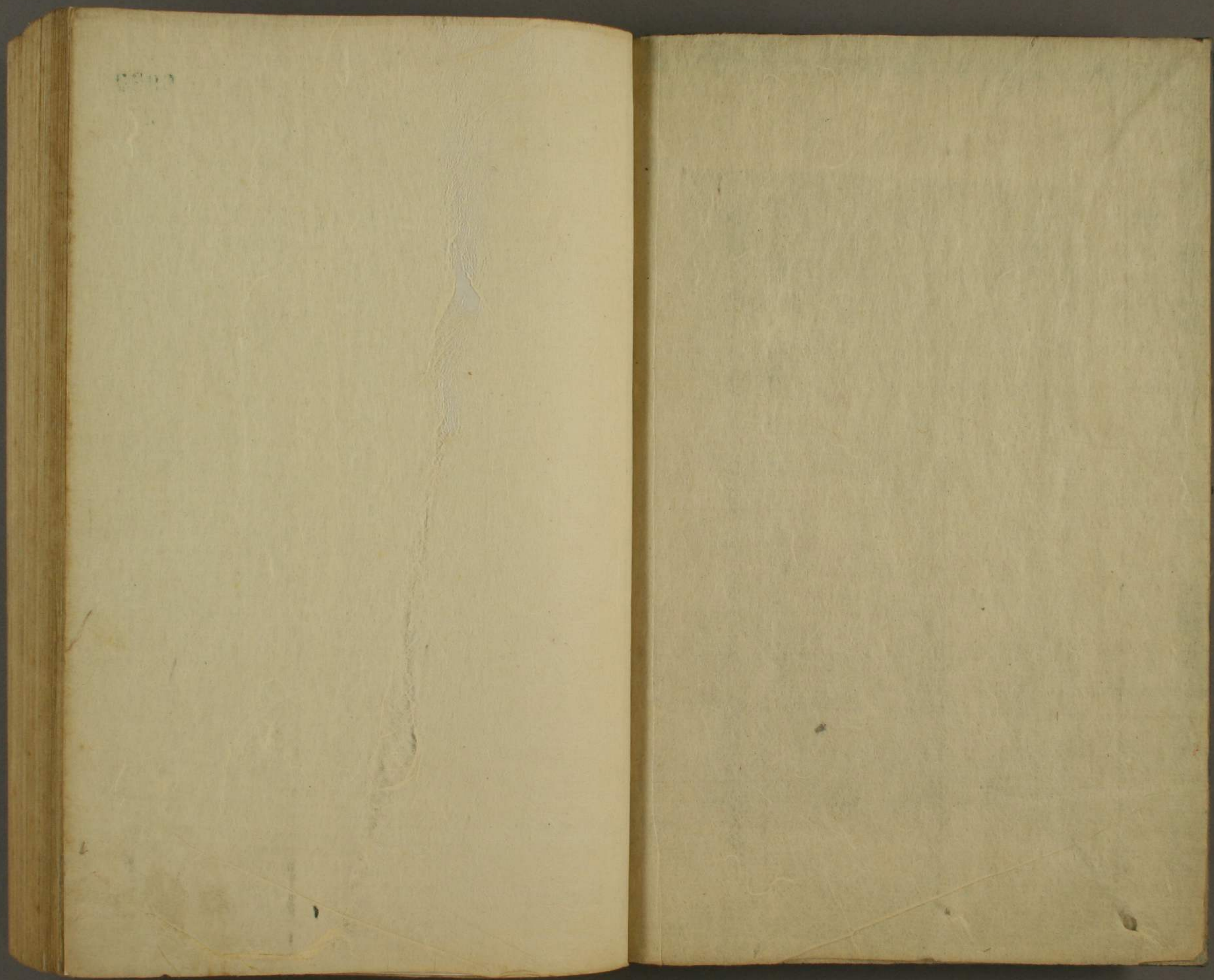
二叟譚奇

附圖壹枚

天

特別
5
6960
1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30



門 0-5
6960
1

譚奇叙



余景者在任函館著東奧道中日誌卷一
松葉談卷後往志杜魯府著概夷地旅中日錄
卷野作紀聞卷二夏地衛生草卷一
卷一遭丁卯之夏皆為鳥有戊辰夏被疾五月
月去為杜魯府七月達都顧往交大半
遺忘知舊請向乃廉以答友人以僅因見
達在本地嬰疾已巳冬亦歸都下多時
訪其寓舍瘦少瘡予謂之云今錄丁卯年
間事者不下數十種一足取信者足云

昭和二十九年
四月七日
購求

無意於記所目擊以喚醒世之膠于語
聞者耶見遠矣某去年來遭罹篤疾
殆為異域之鬼幸而少愈得以來此然身已
偏枯不便把筆加以聲啞舌強言論且
難况於著書乎且北陸之梗實國家孔
恥詔言其審庶乎播揚國醜其可易而
言乎但恨世所稱實錄者如方村招狀如
少業筆記是皆躬履其境目悉其事而
錄者猶然謬妄相望于編矣論其他予
有日記二卷直陳邊事無少顧忌不可浪

示人當就其中鈔出力疾勝寫以成書
煩足下為僕糾謬訂訛使可觀焉因錄
病間所屬稿為此地日記一卷附錄卷既而
多曰足下初共關谷赴字留都府若相隨
往惠杜魯府必至冠相會其禍不測以異
道而來故得脫于難予與子俱以北虜之
故隨身之物蕩焉靡遺猶得存眇然之軀
相見于此抵掌笑語豈匪天乎足下亦不可
嘿以無所著予乃錄曩日得於見聞者以
為北槎小錄卷合于見遠所著名曰二更

譚奇云

予昔文化庚午孟春日

東都 新樂關史撰

北地日記

久保田見達著

文化丁卯四月
 ○北七の朝アリクイ 長美白太病氣之趣中未戸田氏中是是
 仕人とも一時の事なれども八時迄は中へ入りて是れは
 北地より来るものなりと云ふ事ありしに因りて其日
 計し不恒業也此後述す 古くは此の地を「北地」と
 云ふに先づ北地を以てし之を「北地」と云ふは
 固名にシテハ其地は皆倒し直由近きは休長少く其地
 中甲乙如月候に中を春年より其地は其地は其地
 人性は其地は其地は其地は其地は其地は其地は其地
 其地は其地は其地は其地は其地は其地は其地は其地
 其地は其地は其地は其地は其地は其地は其地は其地

今更らるるありき... 陽中亭... 山... 中... 也... 一... 下... 上... 下... 上... 下...

或は我りて... 陽中亭... 山... 中... 也... 一... 下... 上... 下... 上... 下...

とい百目向と見えしわづらふに欲く入ゆるも引控く
山のちをきくまを獲のしけはあまらふと二所よりおゆる
まはとくをさふ人し五はとんとすりよむありて獲刑
ちがひくや誠をなきのほのおねをいけ付ねを老は
らまるとおまゝ見を信んありてさうらふおまのう甲
うらふおまのちと物なすれおまをさうらふおまの
中へナレおまのちと物なすれおまをさうらふおまの
口らおまのちと物なすれおまをさうらふおまの
うして百目をちと物なすれおまをさうらふおまの
御れえうらふおまのちと物なすれおまをさうらふ
南まゝおまのちと物なすれおまをさうらふおまの

いとい百目向と見えしわづらふに欲く入ゆるも引控く
山のちをきくまを獲のしけはあまらふと二所よりおゆる
まはとくをさふ人し五はとんとすりよむありて獲刑
ちがひくや誠をなきのほのおねをいけ付ねを老は
らまるとおまゝ見を信んありてさうらふおまのう甲
うらふおまのちと物なすれおまをさうらふおまの
中へナレおまのちと物なすれおまをさうらふおまの
口らおまのちと物なすれおまをさうらふおまの
うして百目をちと物なすれおまをさうらふおまの
御れえうらふおまのちと物なすれおまをさうらふ
南まゝおまのちと物なすれおまをさうらふおまの

といふに後世に成るものありといふに
 一は其の業ありといふに
 二は其の業ありといふに
 三は其の業ありといふに
 四は其の業ありといふに
 五は其の業ありといふに
 六は其の業ありといふに
 七は其の業ありといふに
 八は其の業ありといふに
 九は其の業ありといふに
 十は其の業ありといふに

昔は水の中と越水より一は凡ゆる合も
 水より一は凡ゆる合も
 一は凡ゆる合も
 二は凡ゆる合も
 三は凡ゆる合も
 四は凡ゆる合も
 五は凡ゆる合も
 六は凡ゆる合も
 七は凡ゆる合も
 八は凡ゆる合も
 九は凡ゆる合も
 十は凡ゆる合も

ぬらり船をんせらる我は時をいぬしとてさしゆは
まじふをいふもあましくしるし舟はまきし馬も湯あらい
ゆふ待ててささくやて思ふわらふことのほすがらもあ
り船をんせりてとゆいぬしとてさしゆは
くまもささくしるしとてさしゆは
まじふをいふもあましくしるし舟はまきし馬も湯あらい
ゆふ待ててささくやて思ふわらふことのほすがらもあ
り船をんせりてとゆいぬしとてさしゆは
くまもささくしるしとてさしゆは

舟は一日船をんせらる我は時をいぬしとてさしゆは
まじふをいふもあましくしるし舟はまきし馬も湯あらい
ゆふ待ててささくやて思ふわらふことのほすがらもあ
り船をんせりてとゆいぬしとてさしゆは
くまもささくしるしとてさしゆは
まじふをいふもあましくしるし舟はまきし馬も湯あらい
ゆふ待ててささくやて思ふわらふことのほすがらもあ
り船をんせりてとゆいぬしとてさしゆは
くまもささくしるしとてさしゆは

やし持我をんうしお後舟地りやまようては任有まぬらま
あひもろあめぬあましよたをしけいれひあしはま
しんかましははまうぬまゆし同をまゆ味方とま
おはるまをしし度種のをまをまをす今子一向おは
とまゆまを言ひまをまをまをまをまをまをまを
あや後給布子まをと求まを地まを中まをりおは種
布ま一つと求まを言ひまをまをまをまをまをまを
まを地後まをり御方まを地引達しまを種まを種まを
油りまをちまをりおはまをまをまをまをまをまを
おる後種まをのまをまを地まをまを地まをまを
まを達まをまをりおはまをまを地まをまを地まを

おはるまを達まをまをりおはまを地まを地まを地まを
油りまをちまをりおはまをまをまをまをまをまを
おる後種まをのまをまを地まをまを地まをまを
まを達まをまをりおはまをまを地まをまを地まを
まを地後まをり御方まを地引達しまを種まを種まを
油りまをちまをりおはまをまをまをまをまをまを
おる後種まをのまをまを地まをまを地まをまを
まを達まをまをりおはまをまを地まをまを地まを
まを地後まをり御方まを地引達しまを種まを種まを
油りまをちまをりおはまをまをまをまをまをまを
おる後種まをのまをまを地まをまを地まをまを
まを達まをまをりおはまをまを地まをまを地まを

の甘藷岩産る事あり水一満りててい船二艘

○四日海上穏る事あり船中船中何れを子ウイニて船中
沖に接ふ左の方と云いハナクも有る船載於人の佐持
いふと海に接するの事子ウイニハ船中も有る事あり
と云ハナクも有る事ありハナクも有る事あり
上流を流るる佐持のていしはけり一ありハナクも
佐持のていしはけりハナクも有る事あり
をハナクも有る事ありハナクも有る事あり
庶人よりツアハナクも有る事ありハナクも有る事あり
惣をハナクも有る事ありハナクも有る事あり
佐持ハナクも有る事ありハナクも有る事あり

佐持ハナクも有る事ありハナクも有る事あり
佐持ハナクも有る事ありハナクも有る事あり
佐持ハナクも有る事ありハナクも有る事あり
佐持ハナクも有る事ありハナクも有る事あり

○五日亦る上島を流る事あり佐持ハナクも有る事あり
の事ありハナクも有る事ありハナクも有る事あり
船中船中一船ハナクも有る事ありハナクも有る事あり
ハナクも有る事ありハナクも有る事ありハナクも有る事あり
ハナクも有る事ありハナクも有る事ありハナクも有る事あり
ハナクも有る事ありハナクも有る事ありハナクも有る事あり
ハナクも有る事ありハナクも有る事ありハナクも有る事あり
ハナクも有る事ありハナクも有る事ありハナクも有る事あり

此の事いふ事人々ちかき事なれども、下の九倍と信じて、
小笠原の事いふ九倍と信じて、
信じてくすすし、
長くもあつた、
船の事いふ、
人を指揮し、
生涯且つ、
大勢の上、
水もあつた、
うすまゝ、
子といふ、

悔ふ事いふ事

○十日の事いふ事、
とて、
去明も、
本とて、
八百、
とて、
船の事、
あつた、
我が事、

陸路にがし地をほるすまありて下地は田を多り
物たるしあ人御方他よりは極る湯糸と物をも浦通り
今やいあり此島よりと目よりし海岸の断崖絶壁と卷を登
まかり下其銀粒のすまありて向もさゆら下りたふ方
無のけきたるさましきまありて生るる山を降り降りて
此の地はうらの通はたすこてり日入候きはるすわりの
あとの水もし中より強と若て合ふ地もたまなり

○九日ふのふともまー海をへつらゆりてはるひのつらゆり
てゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
はるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
内一様たる浦通と思ふははるひのつらゆりてはるひのつらゆり

てはるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
はるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
はるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
はるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
はるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり

○十日掛候も出帆しはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
そらうのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
はるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
はるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり
はるひのつらゆりてはるひのつらゆりてはるひのつらゆり

○ 十六日 陸上 かんきおん 法有 ちん 邦 京 以 名 名 の 名 有
世 信 ぬ け あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

○ 十七日 土曜日 かんきおん 法有 ちん 邦 京 以 名 名 の 名 有
世 信 ぬ け あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

○ 十八日 土曜日 かんきおん 法有 ちん 邦 京 以 名 名 の 名 有
世 信 ぬ け あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

備中紅山坂合園信守^{（信守は信成の伯父なり）}故有^{（信守は信成の伯父なり）}信成^{（信成は信守の弟なり）}と稱^{（信成は信守の弟なり）}見久保田古内匠ト成^{（信成は信守の弟なり）}り
備中紅山坂合園信守^{（信守は信成の伯父なり）}故有^{（信守は信成の伯父なり）}信成^{（信成は信守の弟なり）}と稱^{（信成は信守の弟なり）}見久保田古内匠ト成^{（信成は信守の弟なり）}り
備中紅山坂合園信守^{（信守は信成の伯父なり）}故有^{（信守は信成の伯父なり）}信成^{（信成は信守の弟なり）}と稱^{（信成は信守の弟なり）}見久保田古内匠ト成^{（信成は信守の弟なり）}り

附録

我ハ成諸侯の臣下ニ生じて知事ガ武ト好ミ單騎の術ト
大抵余得シ軍事ニ二流ト推シ少年氣ヲ令シ今日も
致の好々如クト言フ^{（信守は信成の伯父なり）}成と好みの係なるは
也と云々^{（信守は信成の伯父なり）}成と好みの係なるは也と云々
ガト云々持^{（信守は信成の伯父なり）}テ只と稱^{（信守は信成の伯父なり）}テ只と稱^{（信守は信成の伯父なり）}
^{（信守は信成の伯父なり）}備中紅山坂合園信守^{（信守は信成の伯父なり）}故有^{（信守は信成の伯父なり）}信成^{（信成は信守の弟なり）}と稱^{（信成は信守の弟なり）}見久保田古内匠ト成^{（信成は信守の弟なり）}り
備中紅山坂合園信守^{（信守は信成の伯父なり）}故有^{（信守は信成の伯父なり）}信成^{（信成は信守の弟なり）}と稱^{（信成は信守の弟なり）}見久保田古内匠ト成^{（信成は信守の弟なり）}り
備中紅山坂合園信守^{（信守は信成の伯父なり）}故有^{（信守は信成の伯父なり）}信成^{（信成は信守の弟なり）}と稱^{（信成は信守の弟なり）}見久保田古内匠ト成^{（信成は信守の弟なり）}り

起し

○我同文林苑をくしきのしし十三は左部の時の司をす
二はカワの人は金牛にツサうを好むまはる上口の
是後付もあり給ふをえしもし八の軍任候の時我うす
志所も可らしむが却てあらしむけらしむとし右林ふら
とらわしとし林苑りしまるとしものらしむをまるしむ
必し後にしらむをとしては我使の指せしもし我の
木のある上陸の時林苑下の氣をあらしむとし掛りんとして
才をまるふらしむとしてはあらしむけらしむとしては我使の指せしもし
我の使のあらしむとしてはあらしむけらしむとしては我使の指せしもし
會しもあらしむけらしむとしては

○御方をとしては一はまるとしてはあらしむけらしむとして

御方をとしては一はまるとしてはあらしむけらしむとして
と向の時付候其後上口のあらしむけらしむとしては
いのらしむけらしむとしては

○法全と執りトクナふんりねが急礼始しひて為人の言ふは赤
 ゆつり中人書人者よちよ根あるももきとや久子トク
 同様の時或若共若口やんとしてメノコ五人絶アリとまのま
 引は慰らふも母教く人付ら見え若共の近き母教を
 娘のこがとまのまの言ふくつ口をう指るて若とトク
 子何う大人きとして尤もをゆくわふげに娘に声とあひ
 啼位するゆり我はもぬやと同にまゆをふりぬゆと
 若く我の少少のうんとしひが付てらぬぬぬぬた大
 まのまの少少とてらぬ御うこあ金うむ持ぬやつら
 と又わわがまのこく子くいと出れしはとぬゆと
 我しよふたぬはら懐らる若しぬがまのぬ今うて死

せんといふかといひて老母と度むとらふハ哀優しく何
 気きり代ししつらぬ人の申すし我も仕らるるまが
 ぬてらふ人あつさ

○子モロのア子ハツをい企氏、用信し縁頼り休息し
 片たらあふ本まをまゆりの里ありてつく本々秘を
 教するのみ去指はるけけ成とらふま利を我う今つら
 せりしゆり中若指圓若氏うゆ利杖後これ経部お
 本浦のさうう若指これうらまうて字教うしはるま
 せりあふるてしとらぬ利もまう女心の指あしぬ
 教のまこと中若指これぬぬし子の教あはれゆく
 らるる

早のあつらんらんをすけとらふりて記す

我上トロフの愛後越まして翌戊辰の秋紅梅へ出く

府尹集云河内陸奥守留りてよ公さちのあ人紅梅の好まゆ信

せしものりて武園詩しりてわの秘事ハ野あややけ

人のあやまきあやまき凡の幸よあつらんらん

なすもよゆりて真のらんらんをまきと有のまよふとよ

ひのつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん

此もわのあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん

其のけのまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん

其方のあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん

そのあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん

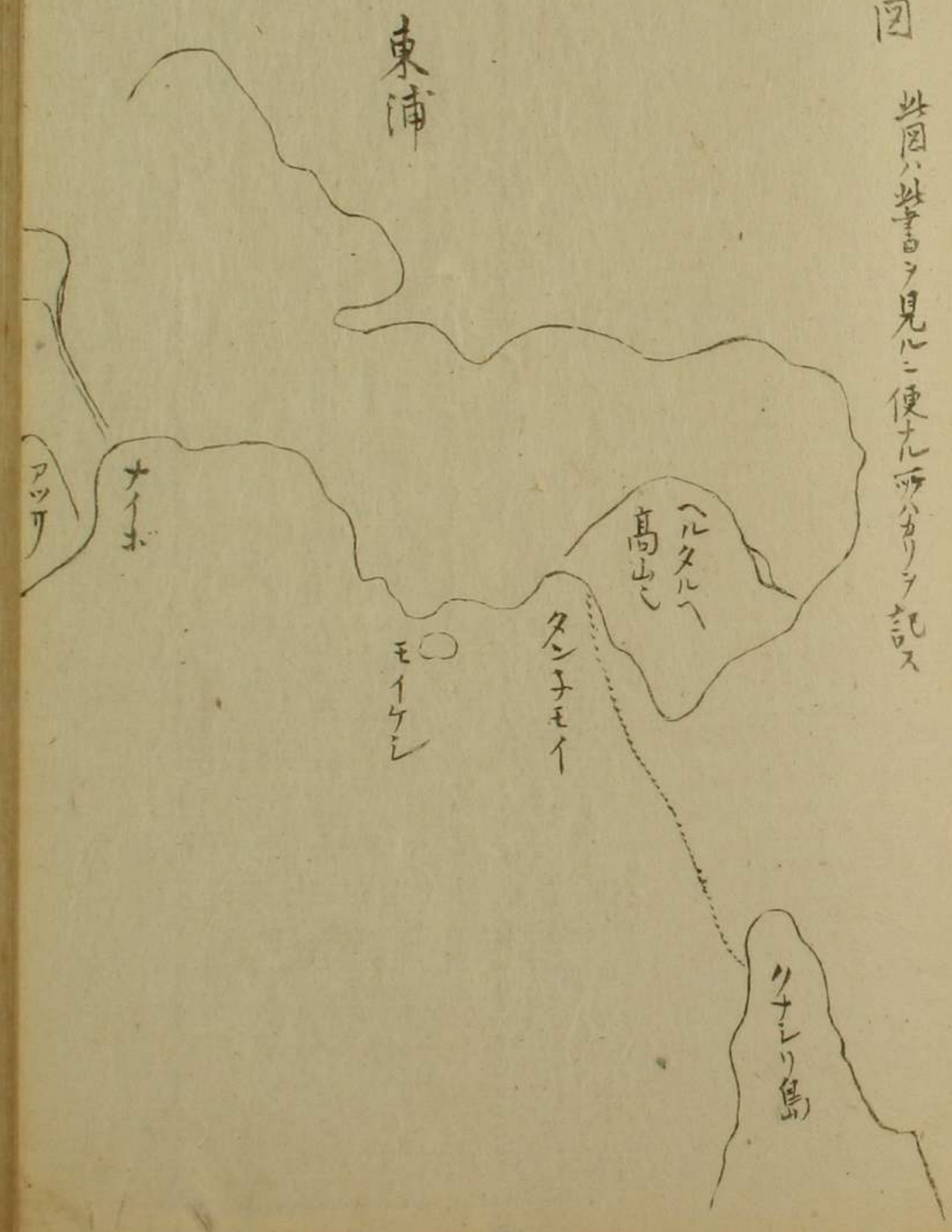
うらとひなをあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
忽近きりしり秘の目もあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
なるもあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
の目もあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
なるもあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
所のあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
斗あ人伝本紅梅信りてあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
よのあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
據と信りてあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
せしものりてあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
やうのあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん
やうのあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらんをまきとあつらんらん

同出及は事と事取れとカ多れと冷天せらるる
止ぬ

見達名推共備杉少人文化七年庚午八月九日没江戸富后
子時年四十五葬于麻布善福寺内全藏寺法諡智照院
秋惠光居士

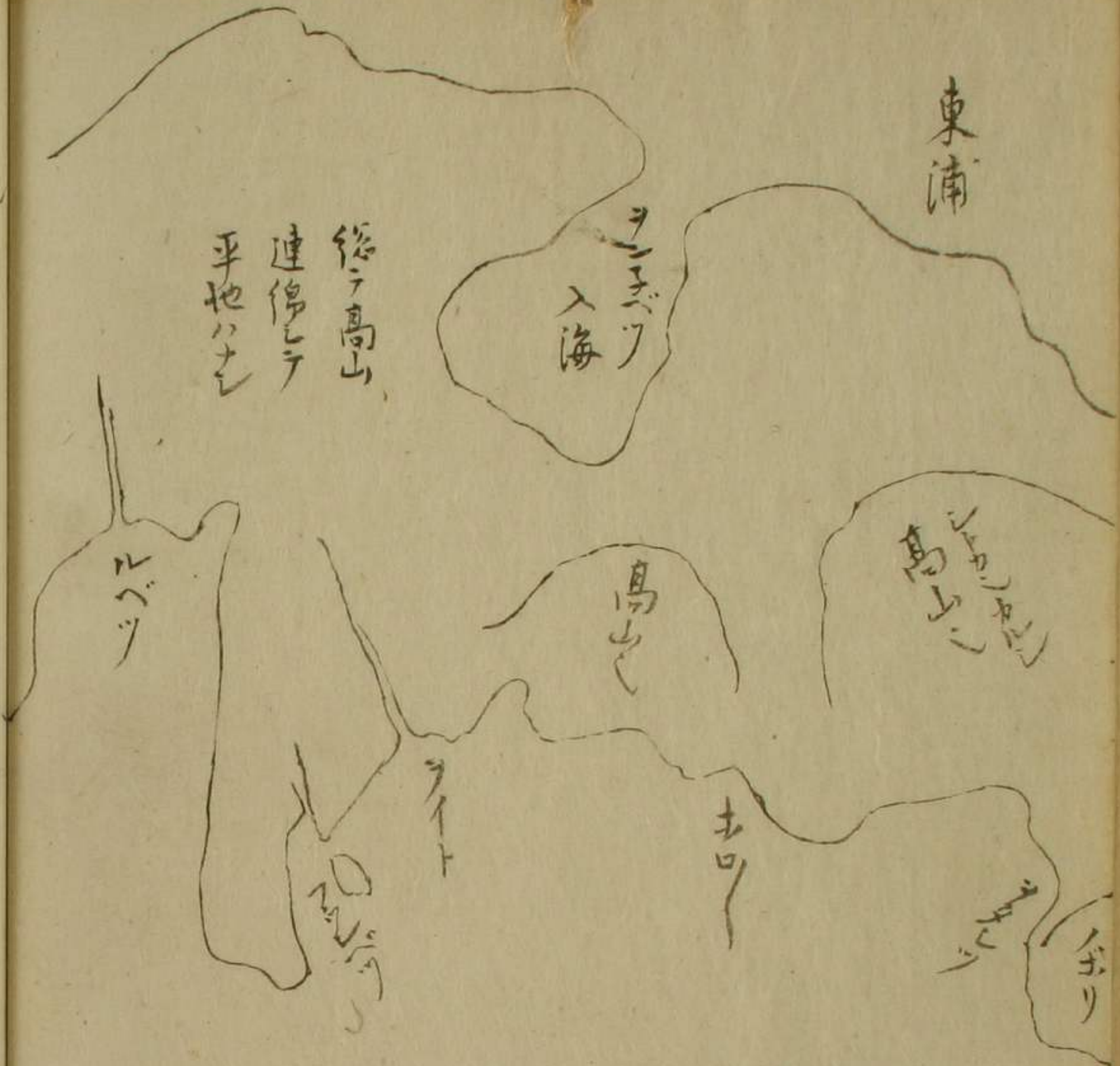
エトロフ嶋界図

此図ハ昔書ヲ見ルニ便九所ハカリテ記ス



東浦

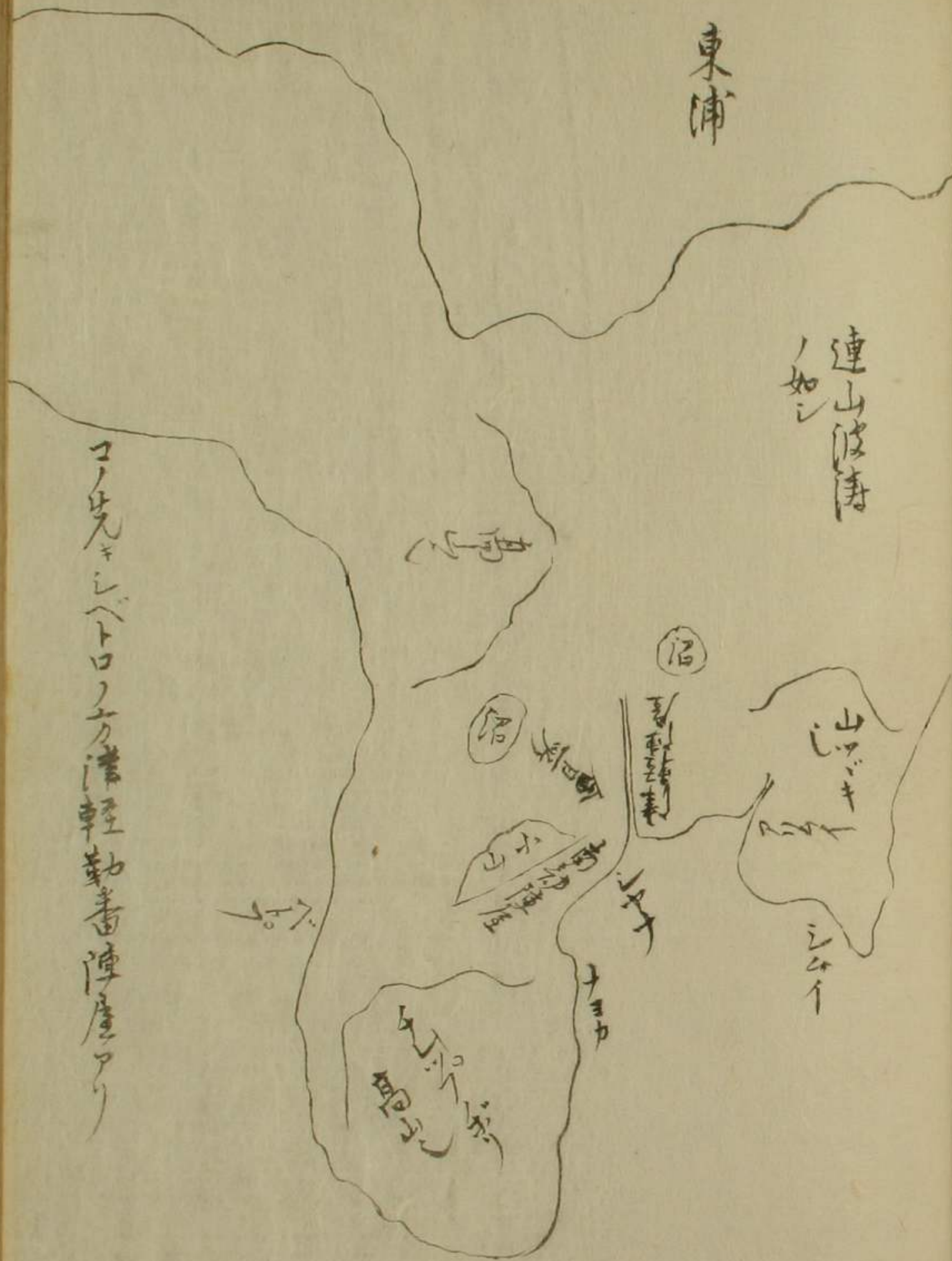
ヨシエツ
入海
総テ高山
連綿シテ
平地ハナシ



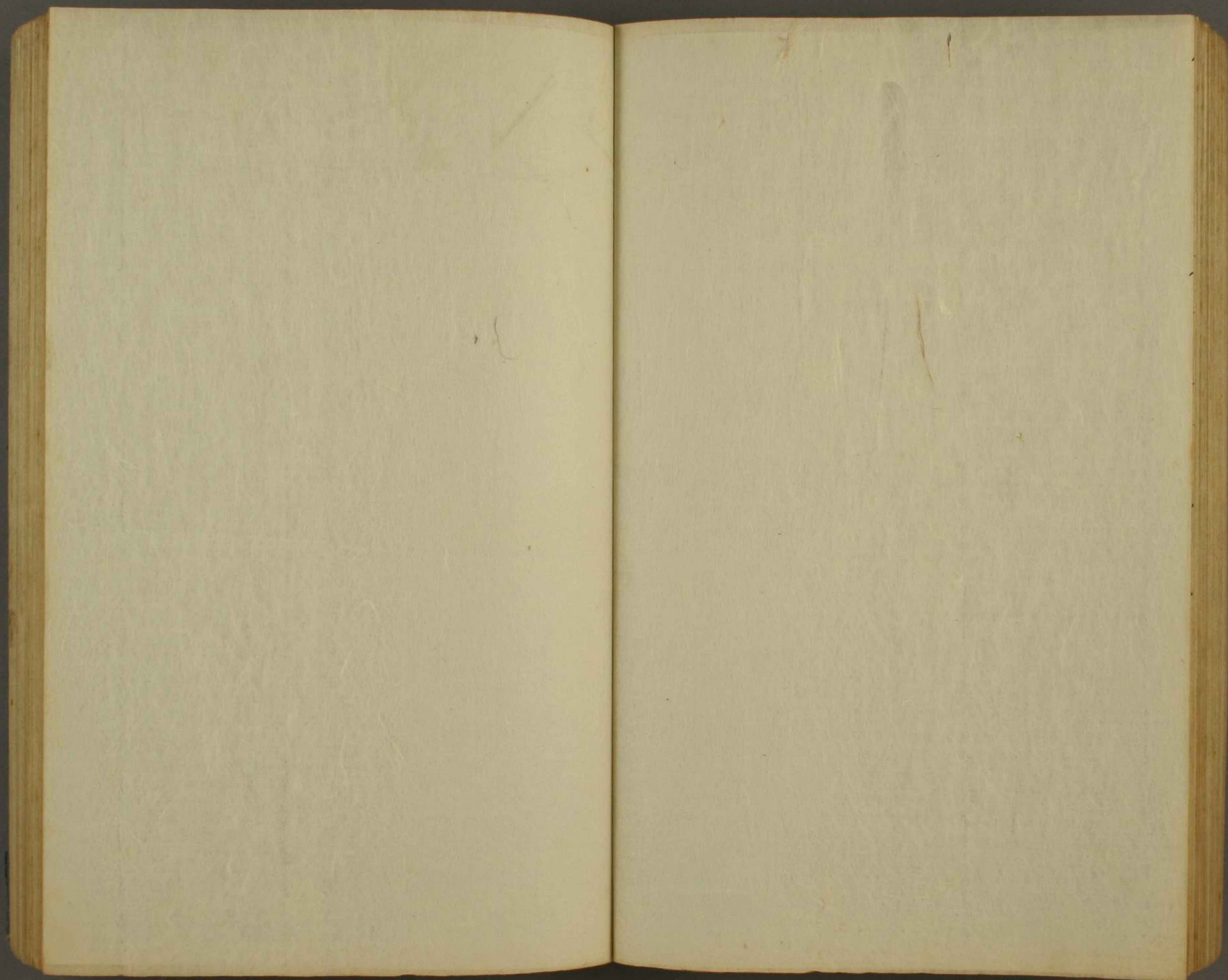
西家勅番ハ舎那會所凡ハ
南部家勅之シトロクカ
渡口ニ外國界シバ津輕家
ヨシ勅之能シトロクカ
北向ノ地故勅番処ト屋
夏ノ内相結冬月氷海カ
越年ノ成兵ト残シトヤナ
の本陣屋チリ冥氣ト後
ツメオカ本陣屋ハシヤナ

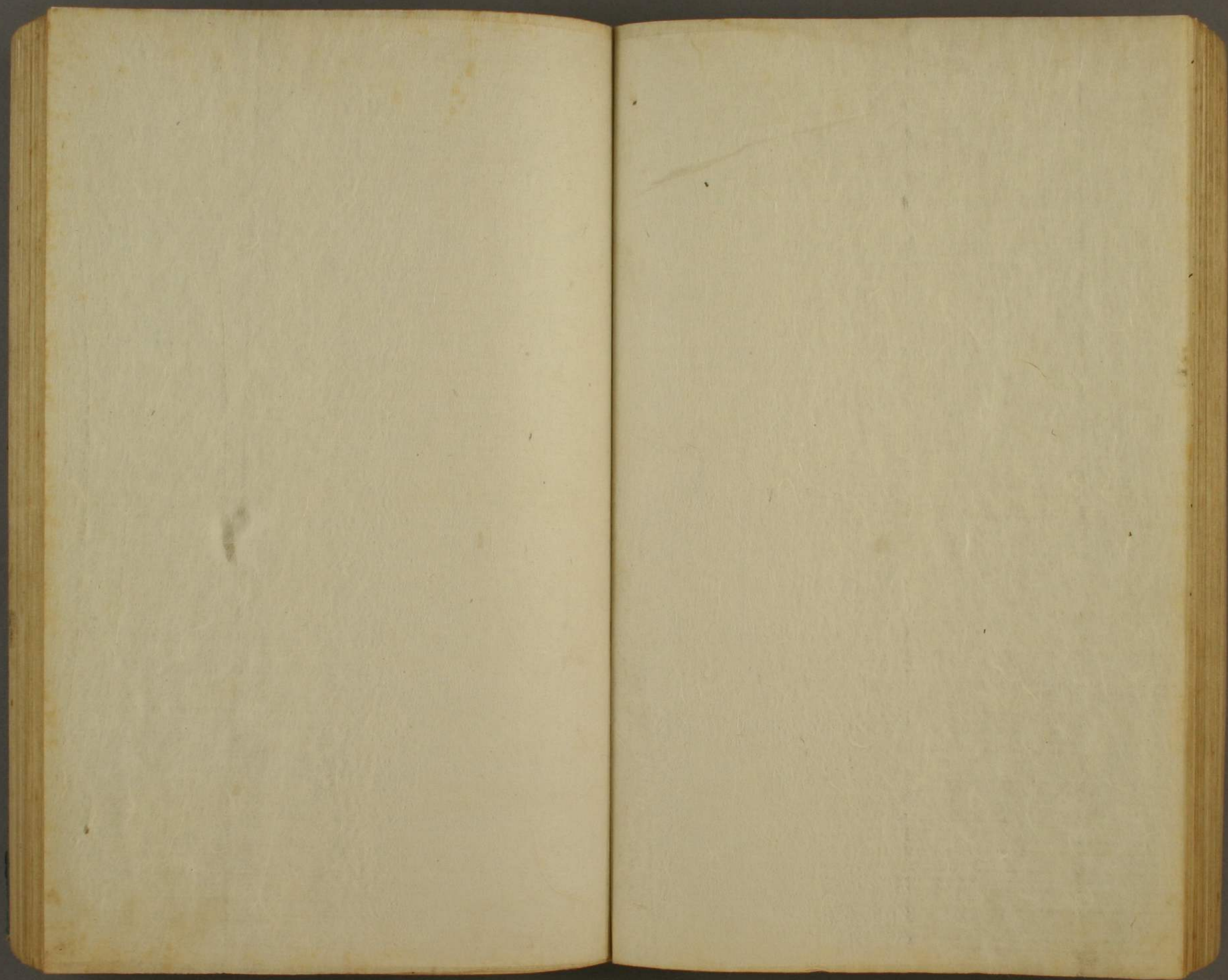
東浦

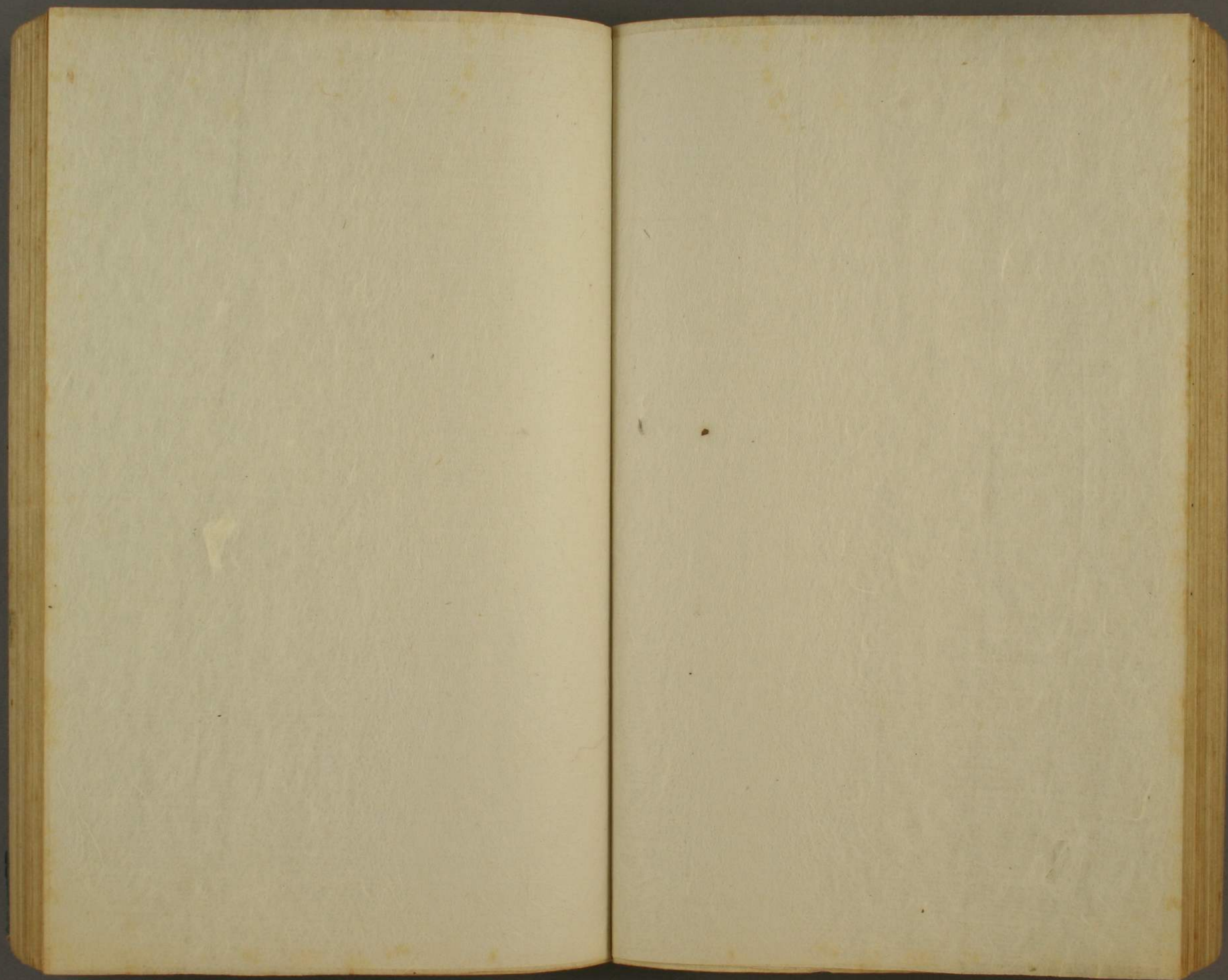
連山波濤
ノ如シ



コノ先キシトロクカ津輕勅番陣屋アリ







北様小録

愛蘭主人著

是年四月九日南航

附々吉江船の初

て去九月カラト建

放々のまをすまひ

知事浦島をすま

早トロフ(金)は也

一海(金)文

一八(金)人(金)

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

二(金)人(金)ま

丁卯三月十日官船萬全丸 千五百石 船頭 長川 伊三郎 本江口

土帆ま 早トロフ鳥之 渡らんとす 風毎逆風好和

なり 潮五月六日 帆夷地子モロの せと あり 早トロフ

早トロフ(金) 二(金)と海路の記

七日晴揚帆エルクトモシリ 振る せんクナシの 島とて 成事

浦直々ヤク 一舟の 岑 クナシの島山 又(金) 流り 早トロフ

浦口の 内人 早トロフ 地入 なる せと 早トロフの 海上 船係 せり

潮ま 早トロフ 一日 早トロフ 船係 せり 早トロフの 船係 せり

早トロフ 早トロフ 早トロフ 早トロフ 早トロフ 早トロフ 早トロフ

出づらんぬちの御座るは... 主の御方よりつりぬる事と
まてきしはつとまてきし物もゆりゆくをぬしむる事
陰謀の事とすともや言ふは田畑の仕立の時とてたまた
もまてきし村の事とすともやゆりしこととてやぬる事
ぬきしと情れりて作ぬゆの縁ゆきしこととて
以やちゆくの事外りいふこととて縁ゆきし事と
すともまてきし事とすともやゆりしこととて

○ 十九日 日和まてきしこととてゆりしこととて

とら陰謀の事とすともや言ふは田畑の仕立の時とてたまた
もまてきし村の事とすともやゆりしこととてやぬる事
ぬきしと情れりて作ぬゆの縁ゆきしこととて
以やちゆくの事外りいふこととて縁ゆきし事と
すともまてきし事とすともやゆりしこととて

らぬこととすともや言ふは田畑の仕立の時とてたまた

○ 十九日 日和まてきしこととてゆりしこととて
とら陰謀の事とすともや言ふは田畑の仕立の時とてたまた
もまてきし村の事とすともやゆりしこととてやぬる事
ぬきしと情れりて作ぬゆの縁ゆきしこととて
以やちゆくの事外りいふこととて縁ゆきし事と
すともまてきし事とすともやゆりしこととて

とらふぬ妙なる如くはとらふすのあつてとらふたけ
たふたうらうし 宿の又は通るたぬと大舟と積と陣を
けり登る松灯の結布すのひしむをのやしとあふ人
たひし切らすはまのくよひの自をささて細く結るし
空あつてさるの影をさゆつと痛し暗きゆの自のささ
中陰うて直るもあつて湯屋のたけおと地の奥せし
若のたつとつと始りしとらふとらふし昇平のゆ代ささ
ましくクナシリえ侍をたれをたれとらふとらふし
舟のひましくさつとささしはさつとらふとらふし
打火輝くとちさ甲女のたつとらふとらふしゆか
るらうゆの油燈たつとらふとらふし同下はさつとらふし陣
お

おとほふありーがささの事ゆ人へら若もたつ仕る若
のたつしとらえは若とらふたつたつたつたつたつたつ
たつ仕る若とらえは若とらふたつたつたつたつたつたつ
あつてさつとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ
ゆのたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
たつとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ
たつとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ
たつとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ

○ 本頁のゆの今を若のゆはゆ目見ゆ社とつる正トロフ
ゆの若まふたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
南地方へゆゆし始末とつたつたつたつたつたつたつたつ
唐のゆをまふたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ

地すし 船如し 葉なる物 雲入りし ときまはれし 船は 船の
極す 船の 舟に 舟 葉 乾物 乾物 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
と 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
の 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
起る 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

○ 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
下 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

○ 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

○ 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

○ 晦日 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

○ 六月 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

○ 五日 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

上下は長く舟に群れをとりて舟に飲食もせず二日
も舟に乗りて舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
又舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

○九日は舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

○十日は舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

○十一日は舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

○十二日は舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

○十三日は舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり
舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり舟に泊りし事なり

○十四日由之教河原立皇孫子ハ泊船去大船也
 ○十五日由河原夜八ツ時出船川三里宿舟泊出
 ○十六日晴海と浪り休息少居之南河一ありて泊三里
 海より子王日去不居地ハ由向人船取りて居
 小種住多のぬれ物ゆきまの少ありて好ありて居る
 ○十七日五トロフより皇孫子ハ南より野者高田立皇孫子
 子王日ハく銀張の地行し途中偶逢とるやる居人ハ
 作し改むて一記 遇難途中作 襲来孤島赤人船
 一戦何回乱似線 鶴唳風聲驚耐聽 因思符堅度肥年
 海動山鳴大銃音 謀非兵怯奈奈心 此身縱美江東腹面
 縛何為赤人擄 今尋攀上白雲今分竹柵羅下野深

報長杜杜鶴
 ナレ杜杜鶴
 假代

日飲漢流時會州、行凌飢渴卧山林、曉發行送朝霧中、
 嶼、品時處見躑躅、逡巡百步還求道、始覺山雲道寸
 路窮、敗將提刀急向西、突喉割腹斃山後、杜鶴似恨非
 帝丸、我妻飛來濺血啼、赤人頻放銃、大急陷營中、風
 浪驚官岸、鳴鴻怪度空、全生誰所欲、思在各相同、衆
 難險、乘船喜不窮、五トロフ、地後上好是、在國用武是、
 赤人十部、梅は多を、少きま、と、アワ、と、と、居り、
 法合大塚、思、た、身、利、空、を、後、く、引、返、さ、せ、
 〇九三日子王日也船ノツケ忌泊遊ハハけと五トロフを居平好
 長年生ハクナレリトヤヤハシリヤヤハシ平島並てハトロフを居

舟人組のまことよきあけし、枝節しまり余りよき舟
 出帆舟人一人持ちぬくと軽し、くまもくも大船とあり
 あり、懐中より書付出ると、くまの書付、おれ、
 坊を、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 多布く、横め、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 夫より、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 ○ 十四日、南代平島、二日、くま、くま、くま、くま、
 くる、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 くる、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 上ト、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 ○ 十五日、九時、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 くる、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、

○ 十六日、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 くる、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 信ふく、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 ○ 七月、八日、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 くる、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 ○ 九日、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 くる、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 ○ 七月、十一日、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 くる、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、
 ○ ナ、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、くま、

○十五日忽ち南風をぬきとち北より風を吹き
 して海はゆるり波は里がらとち北に吹きおこりし
 ○十六日夜に性晴風は吹きし四方は風もよく吹き
 風強く西より吹くことありて北と東南に向き
 ぬてのちとちより吹く地もよく吹くことありて
 吹く方方^{つら}しつら^の向^入ぬ後^の通^二程^のとち^一ありて
 海上に雲を吹く事ありて平陸より北に接兵の事とちありて
 是れ好後^の吹く事ありて是れ越年^の見聞^と記す

○^死とちとち^の程^のを^りぬ^れ程^に 銀難^{より}とちとち^の事^と記す
 程とちとち^の事^と記す^程の^事と^記す^程の^事と^記す
 口もとの海上に吹く事ありて程とちとちの事とちありて
 金積の事とちとちの事とちとちの事とちとちの事とちとち
 校隘^{より}とちとちの事とちとちの事とちとちの事とちとち
 沙物^{より}とちとちの事とちとちの事とちとちの事とちとち
 こととちとちとちの事とちとちの事とちとちの事とちとち
 地とちとちとちの事とちとちの事とちとちの事とちとち
 なく^程の^事と^記す^程の^事と^記す^程の^事と^記す^程の^事と^記す
 ち^程の^事と^記す^程の^事と^記す^程の^事と^記す^程の^事と^記す
 ち^程の^事と^記す^程の^事と^記す^程の^事と^記す^程の^事と^記す

元ハ仰の若き隆々^{ツラク}輪^ワのりたをわきまなくしやゆとて
船中第一要紀の地りぬれぬるやらず妙なるは信しれぬ
たも呼ばれんかたまたま起れずるは旅船といふ軍中
なれぬ礼儀よくて混しかりしものもほろり頭を
紐とあり公儀と南にありあつたまはつてしんをさず
たれたるは合しや誠と信と信する所しれぬもあはれ
若ら各船の妙なるゆへにやまはれし帆の信の風ぬり
弱るゆゆりて逆風承ち進出せむは船解とてれは飲
食よりしるす船なるも及世とつて二信とつたる奥様は
たも舟人をもたせしや妙哉よにらるるをさすいあら
ぬは後水走しく湯水一切なくふこがの信とてさす

又陸中やまのめと合すれぬ湯水のゆへにもし禁ざると家の
性徳固苦とてしけりたも毎とさしり我の船よ研をゆへ
切りて若新動搖するも旅するへて合すしし汁は妻一
方許す徳と以て後有は法ゆへにさすししはしりゆの瓶に
固く切ししとてし軍中何ゆへに船なるゆへにさす

○ サイロハけりる尾をせゆりて固き若新船を行中船あり
さす^{固き}固きも敗走は旅ゆへにさすししはしりゆの瓶に
くもがししはしりて我のゆへにさすししはしりゆの瓶に
誠よまはる毎とて信ししをさすししはしりゆの瓶に
牛もたるとしゆりしをさすししはしりゆの瓶に
ししゆりししをさすししはしりゆの瓶に

エトロフの鳥カニの別種は形も啼きも少し異なり俗にエトロフ鳥
と云ふ啼き声はとてしめく種々の音とて我々の唾と
常のものとちよましく直にひらひらの鳥と云ふは俗に鳥二種と云
ふらとて鳥と云ふは通譯の鳥と云ふし夢遊子
の流は北方は鳥の代りて改羅巴洲諾尔忽入里とて白
孔雀と云ふは鳥の卵と云ふは雪雞と云ふ鳩と云ふ
牝子と云ふはスッコリア及エイスラト小白狼白熊と云ふ
即狼と云ふは白色の鯨と云ふは蓋小方を代りて白物と云ふ
南方より國人及鯨も黒色ありと相及すと云ふ因に
之よりエトロフの鯨は灰毛色と白の駁あり又白鯨と
りて鯨のともを云ふ也其の鯨はともを云ふは物に云ふ

海豹も灰毛のものあり鯨の卵も海をのみ 雀は八分と
丹し其の日を記すくおあり其月後白雀ありウバシイ
べとらやるる月を云ふとて 雀の卵あり 雲を合すと捕て
仰て之をみるははははとて 雲は何時也

○イトヒリカとて云ふはオホカラサカ地方の鳥あり其の
エトロフまがらひの鳥と云ふは、大に、鴨カウの如く、其の鳴き声は
曲りて怪しき也、其の鳥の如く、海鳥の如く、其の鳴き声は
以て之をエトロフ鳥と云ふは、其の鳥の如く、其の鳴き声は

○クニエモイは地味と云ふは、其の鳥の如く、其の鳴き声は、
仰て、其の鳥の如く、其の鳴き声は、其の鳥の如く、其の鳴き声は、
其の鳥の如く、其の鳴き声は、其の鳥の如く、其の鳴き声は、

とふいふとくさきと起つゆふまてか来ん其あかふ人
ひら洗物とねはめ候とる所へけし洗物入り上座へけし候
もあつしすつとがめさきあつ御行上座にお出さる事も
すもんさきさき木下根親せし夫席かキナニたつてけりし
其うげくへ候もつとくしりかたう御末上座へ入りし
まづ御いふことする御割の元より一ツ言ふとくまてつし
をいふと清くときさきさきさきで女衆メノコも人へかきさ人へ
けさうお交ふ人とも思ひきき候し是れがあつ御の候
けししゆわつしと言行を通ぢする格とあつ上座おこし干練
しつてさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
候とさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

振るえしが酒あつてくさきとあつ御が飲さるゆへに
草とねく草さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
おあつしゆわつしとくさきさきさきさきさきさきさきさき
りさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
あつしゆわつしとくさきさきさきさきさきさきさきさき
後めさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
何とさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
けしし言行の通ぢさきさきさきさきさきさきさきさき
般勢のねさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
ちあさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

持てて赤人と移すんといふ先づ別れたる所へ付くは
うふふ人々人じやたあう候まのつとて言付通函と
振返り候はらうと全れとありあはれとく候はれど
子の上赤人おぼたうたは^{おぼた}おぼた^{おぼた}子も山うらうらとて
銭物銭物といふも人物らやゆはまてみふ人
いふもあやうけりてあやうけりては海ぶらう
せりていふも酒は海ぶらうの酒とて初まると
すうとてあやうけりていふも海ぶらうの酒とて
まて新方のいふもと候はらうとて海ぶらうの酒とて
我れいふもとて移すていふも海ぶらうの酒とて
後まよとていふもとて海ぶらうの酒とて

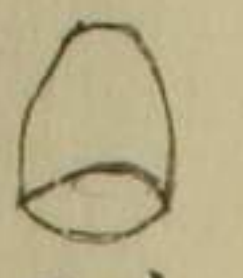
まよとていふもとて海ぶらうの酒とて
行はれとていふもとて海ぶらうの酒とて
かゆとていふもとて海ぶらうの酒とて
あやうとていふもとて海ぶらうの酒とて
赤人の名とていふもとて海ぶらうの酒とて
うらうとていふもとて海ぶらうの酒とて
らやとていふもとて海ぶらうの酒とて
撰らうとていふもとて海ぶらうの酒とて
負とていふもとて海ぶらうの酒とて

○赤人あやうけりて海ぶらうの酒とて
海ぶらうの酒とて海ぶらうの酒とて

行是助入ちよとて我輩助く言ひまうぬとてし理せぬ
ふな方ののちなりしすれがと神よすものまじり我信の方
の仕方にとりて如き我輩は原おはやく山は毎ほらまを
ゆくおと後より切替すまはううまを助といふ若きあつと
きりて人きし切うけ海よと負 海と海

○陽助法施ふちとて怪はしせず喜ばるもふし一に後くしり
つ流りせ、き温泉を流すし瘧疾の撰漢し羅納の少知出る
く少留し込むとる中明きなる三月一期の時よりしゆや
たよ痛むとらふ我輩は病を治す所、か夜も痛を呻ひつめ
若きこゆを後付すの痛は愈つらんといふ

○しや十金おの族は法施四挺 内二挺は 牛角はふ入赤帽子
お救



赤すくひんらや 我信も存しまじり根根しつてありし
の教をいゆる

まじりふしとてたわありてすよ少迄鳥夷の地く
冠せし時の例えもやのらん其は饒首裕うして瑣細の
まよ石物とらとふして妻人ふと收りしとわよと一ひ
た、石を置法施の巻たうしてまじり平代の院とてははば
ころ移らちた目いらしとすし先は煙筒の指くせおあよ
とくしとくしとるのむあてらうとて法施とちり、麻庵 チヤニミ
は、まよからげはむくまの元身教言うて包くすいふ
息しとるものもむあてらう

○アリタイのふおんたい ミヤカ とうふおよ全思雁の社
ナカサリ
まじり船をうけ清く最妙の同の時よるまろくまを船を

成難く此より巨屋のみと大石海屋よりまがれお除
ゆるにぬかし此より大石の岡崎屋を移すといふ事と船
改よりしる心の何になるかお入何れか難くもいふ事
け若事してし金五百より信負船をいしヤチと巻子
して其の事とお除船繋の屋をいしゆり一名お松屋
りお松屋と名の高田屋をいし船改よりして船と海と子後の
ある金屋と船信しお社神船信屋具と造りし
まし御馬桃灯燈籠種々奉納あり毎月九日の夜に
去し御方より男女通信し酒のい鼓吹歌舞ありと
しと事いしお入人元於大石のいしヤチと名お花より
お入所より日光の社信改 エトロフ子の太鼓信改と
お入社と神信屋具 神明指

荷社ありしより馬屋を移すお松屋此金屋と船信改よりして
焼舟よりぬき夷人行きと神船草の上よりと事いしお松屋
今おつらしつう信をいしお松屋と大石のいしヤチと名お花より
今よりお松屋のいしヤチと名お花よりと事いしお松屋
お入よりぬきお松屋のいしヤチと名お花よりと事いしお松屋
お松屋よりぬき

○ 東浦より子へつらあ中よりお松屋のいしヤチと名お花より
お松屋よりぬきお松屋のいしヤチと名お花よりと事いしお松屋
お松屋よりぬきお松屋のいしヤチと名お花よりと事いしお松屋
お松屋よりぬきお松屋のいしヤチと名お花よりと事いしお松屋
お松屋よりぬきお松屋のいしヤチと名お花よりと事いしお松屋
お松屋よりぬきお松屋のいしヤチと名お花よりと事いしお松屋

一、島の事
一、島の事
一、島の事

○
一、島の事
一、島の事
一、島の事

一、島の事
一、島の事
一、島の事

餘録

丁卯の事と集録するところより其間懐の如き事を経て
何国訛謬より出たり一太吹塵と云うる傳りたりと云ふ事
但亦其地と歴傳する所の訛り不致付く傳り今下口
の事と記する所の四五等と考へ其信を仰ぐ事と記す

○大山酒師專寺本師口書
書中より少くは跡漏りたりと云ふ事

○津輕家書状 六月十九日附
其の姓名

木のりルハツるの如し船中を合の夷之故山と云ふ中を酒えに
ふとも事なき人と思ふ中出づる事あり
此説なき事と此説ありと云ふ事あり

此のころに舟に乗る者多しと云ふに石野等可なりと云ふは
もまづし但し之に上りてはしるべし其れ其れまのあつて
ふりてはしるべし付しよと云ふ

徳とてかきと云ふ

法施のふく徳ははるく別と徳と別とありしなり

舟に乗るゆゑに高田村に於て多量に大禁して白書の上し
公儀舟修しを初り南都山へ移り同座とて之の徳をいふと
ててはしるべし信し舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし

見達云々ありしと云ふ進言をもちて諸人の心をこころし
如くおれしと云ふ進言をもちて諸人の心をこころし
大いなる進言をもちて諸人の心をこころし

○千尋集の進言記

文化元年四月三日より五日まで其の別と云ふはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし

舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし

舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし
舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし舟乗りてはしるべし

しるるを陽助が扱ふ事と云

陽助其方より仰つて致と云しし向無人の事と云

忠化丸平の返と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

之れより思の到りし乃中又其より思の到りし乃中又其より思の到りし乃中

之れより思の到りし乃中又其より思の到りし乃中又其より思の到りし乃中

之れより思の到りし乃中又其より思の到りし乃中又其より思の到りし乃中

又云云身事し其の後の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

すべし此中よりや浮く我不信

又云此止名の浮後と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

また其れ下を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

また其れ下を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

定まらし其事つゆと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

後く言ふ事と云ふ事

細に云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

より其事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

又云云事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

入事しし事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

時より可敷く云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

之れより思の到りし乃中又其より思の到りし乃中又其より思の到りし乃中

之れより思の到りし乃中又其より思の到りし乃中又其より思の到りし乃中

之れより思の到りし乃中又其より思の到りし乃中又其より思の到りし乃中

達しつゝし前より近づく様を達し行のよけ
あらはせしむるわらわしむる清きまのこころを計
畧もあらん

見達するまゝの心は、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
公儀に於ては、生きたるのつらさを、見達するまゝの心
なり。女心のゆゑや。

見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
此の世に於ては、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
おぼやかしむるつらさを、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
おぼやかしむるつらさを、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
せらして、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心

おぼやかしむるつらさを、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
おぼやかしむるつらさを、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
おぼやかしむるつらさを、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
おぼやかしむるつらさを、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心

細にたのむまゝの心は、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
此の世に於ては、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心

具にこそ此の世に於ては、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
とす。女証なりん。

○大村招状

此書詳畧に通り、其行の圖に、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
女証と他とよと、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心
す。のこころ、見達するまゝの心と雖も、見達するまゝの心

此は修ハし印の事ありんふしと之を申ふる病名
ありんふし其方界を治すことりんふし別と記す
しんふし

